読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

命を預かる覚悟を学ぶ――。天野篤教授（右から２人目）の心臓手術を見学する高校生（左）

巻頭特集　医師志す8人 心臓手術を見学
命預かる覚悟 間近に 2･3

リポート　第25回 英国科学実験講座
クリスマス･レクチャー2015 4･5

シンポジウム　**「本屋に行こう@大阪」** 6
「未来を創る研究者が目指すもの」 7

お知らせ･短信　「大学の実力2016」発売　ほか　8･9　　リレーエッセー　10

2015.10
Vol.9

医師志す高校生 心臓手術を見学

順天堂医療チームに密着 命預かる覚悟学ぶ

心臓を動かしたまま行う天野教授（中央）の冠動脈バイパス手術を見学する生徒たち（右の2人）

天皇陛下の執刀医として知られる天野篤・順天堂大学医学部心臓血管外科教授（59）と同科は今夏、医師を志す高校生8人を受け入れ、早期医療体験プログラムを行った。生徒たちは2人1組で3日ずつ、天野教授が率いる医療チームに早朝から密着、順天堂医院（東京都文京区）の心臓手術に立ち会った。手術後の患者と面会もし、「命を預かる覚悟」「なぜ医師になりたいのか」を考えた。8人は読売教育ネットワーク参加校の生徒で、プログラムはネットワーク活動の一環として行われた。（この記事は、9月12日付朝刊に掲載されました）

「美しく神秘的だった」

無影灯の下、天野教授が直径2ミリの動脈を、髪の毛より細い糸で心臓表面の血管に縫いつけていく。心臓を動かしたまま血管の狭窄（きょうさく）部分に迂回路（バイパス）を作る冠動脈バイパス手術の真っ最中だ。教授の手は素早く正確に動き、糸がキラキラと光る。この様子を神奈川県立湘南高2年・樋口茉莉愛さん（16）と開智高2年・樋口晴哉さん（17）が見守った。

この日の患者は73歳。硬化した冠動脈に5か所のバイパスを作り終わったのは午後1時半。手術開始から4時間10分が過ぎていた。

「バイパスに血が流れる瞬間を確認できた。美しく神秘的だった」。2人は圧倒されていた。

厳しい叱責も

体験の舞台は順天堂医院5階の手術室。中央の手術台と医療機器が並ぶ器械台は「清潔域」として、医療チームしか近寄ることはできない。

執刀医と看護師、臨床工学士らの間で飛び交う指示と確認。心臓に装着される人工心肺装置のチューブ類。高校生たちは清潔域から50センチ以上離れ、医師の解説を受けながら手術を見学した。

彼らの印象に強く残った点がある。それは手術中の教授の厳しい指導だ。

「糸を握る角度が違う。なぜ約束を守れない！」

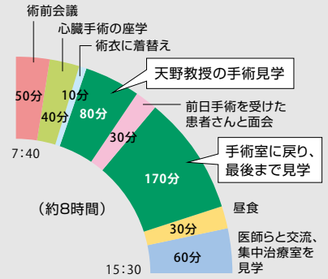
容赦ない叱責は時には准教授に、時には器械出し担当の看護師に向けられる。市川高2年・安藤実さん（16）は「ミスが許されない、厳しさが必要な世界だ」と受け止めた。

ミニ解説

早期医療体験（early exposure）

通常、大学医学部1、2年生を対象に行われ、地域医療の見学や外来患者エスコートなどがある。

今回、天野教授があえて高校生を対象とした背景には過剰ともいえる医学部進学熱がある。医学部合格を目標とするのではなく、「良い医師」となることを目指し、医療に携わる心構えを具体的にイメージしてもらうのが目的だ。今回のプログラムは、7月下旬から8月下旬にかけて毎週3日間、順天堂医院で行われ、患者らの同意を得て心臓手術や集中治療室を見学した。



■早期医療体験 1日のスケジュール

天野教授「すべてを見せた理由」

「何のために医師になるのか、どのような医師になりたいのか」――医学部に入る前に、しっかり考えてもらいたくて高校生たちを受け入れました。

手術は早朝から始まり、全てが終わるのが翌日ということも珍しくない。生徒たちの目に、我々の仕事はエクストリーム（極限）に映ったはずです。

でも、医師になりたいという願いが熱い今、脳裏に焼きつける映像、記憶が大切。最前線に触れて志が固まれば、将来どんなエクストリームな日々にも耐えられます。すべてを見せた理由が、そこにあります。

「自分は医師に向いているのか」という適性も考えてほしかったことの一つです。なぜか。医師育成には多額の税金が投入されます。少子高齢化が進み、医療費が高騰するなか、医師にはこれまで以上に社会への貢献が求められるでしょう。当直が続き、緊急呼び出しもある。生半可な志では続かない仕事です。ハードワークをこなす医療チームの背中を見て、「自分にもできるのか」と考えてもらいたかったのです。

命を預かる厳しさ、やりがいを体感することは学校では教えられません。誰でもインターネットで専門的な医学情報を得られる今だからこその「早期医療体験」、医学部が行える生の教育なのです。

1歳児の鼓動

小児心臓手術は生徒たちの心を大きく揺さぶった。

桐蔭学園中等教育学校5年・梶井亮さん（16）は、手術台の上で麻酔前の1歳児があやされる場面を目の当たりにした。男児は心臓に四つの先天性奇形を持って生まれ、生後1か月で人工血管を入れた。だが、根治には再手術が必要だった。

胸骨切開から約1時間15分、人工心肺装置が血液の循環を肩代わりし始める。心拍測定の電子音が消え、ピンク色だった心臓は白くしぼんだ。

透き通るような心臓にメスが入り、途中、心筋を保護するため切開した胸は氷で覆われた。頭上のモニターを食い入るように見つめた梶井さんは「心臓を長時間止めて本当に助かるのか心配だった。でも、心臓が再び動き出したとき、命の力強さを感じた。やりがいのある仕事だと思った」と話す。

執刀した川崎志保理医師（58）は小児心臓手術のパイオニア。生徒たちに「野球は3割打つと評価されるが、我々は100％の結果を出さないと目の前で患者さんが亡くなる」と語る。それでも10年に1回ぐらい、うまくいかないことがあると指摘し、「そんな時は、その場で申告しないといけない。自ら認める勇気が医師には必要だ」。かみしめるように話した。

「すごい。鼓動が聞こえる」

教授が最も重視したのは、手術からの回復ぶりを自分の目で確認することだ。

手術前、生後4か月の女児の心音を聞かせてもらった学習院女子高等科2年・土方美奈子さん（16）は、心配そうに中西啓介医師（32）に報告した。

「ザーザーと風が吹き荒れるような音しかしません」

心室に欠損があるためだという。その穴を合成繊維でふさぐ手術が終わった後、再び聴診器を当てた土方さんは息をのんだ。

「すごい、風がやんでいる。ドクンドクンという鼓動が聞こえる」

海陽中等教育学校5年・水橋優介さん（17）ら2人は、大動脈の一部を切除して人工血管に替えた高校生と面会した。

手術から13時間、ベッドに上半身を起こした高校生が迎えてくれた。

「血管が極端に狭まっていたため、階段を上がると疲れ、片頭痛もひどかった」

手術の影響で声は深くしゃがれている。自らの病気や剣道で活躍する夢を伝え、最後に絞り出すように2人に話しかけた。

「苦しむ患者を幸せにする、そんなお医者さんになってほしい」

渋谷教育学園渋谷高2年・冨田瑞葉さん（17）と鴎友学園女子高2年・佐久間海帆さん（16）は心停止となった患者の緊急手術を見学した。

翌日、集中治療室を訪れた2人は驚いた。冠動脈に複数のバイパスを作る緊急手術を受けた患者が、元気にゼリーを食べていたからだ。医学の力を実感したが、同じフロアで体に何本ものチューブを付けた終末期の男性がいたことが忘れられないという。

「天井の一点を見つめ、体をかすかに動かすだけ。心停止から戻ってくる人もいれば、どうしても治らない人もいる」。生死について考えさせられた。

2人を案内した梶本完医師（40）は言う。「やりがいはある。でも、憧れだけでは務まらない、あらゆる覚悟が必要な仕事です」

人の生きる力を支えたい。患者の不安と痛みを取り除きたい――。命を預かる厳しさを学びながら8人が胸に刻んだ思いだ。

小児の心臓手術前、医師の指導を受けながら聴診器で心音を聞いた

第25回 英国科学実験講座
クリスマス・レクチャー2015

英国で190年間続く子供向けの科学イベントを日本で再現する
「第25回 英国科学実験講座 2015クリスマス・レクチャー」（読売新聞社主催）が9月12、13日、
東京・大岡山の東京工業大レクチャーシアターで約650人の聴講者を集めて行われた。

離れた場所に 音 香り 味 を伝える

クリスマス・レクチャーは英王立研究所が毎年冬にロンドンで開催してきた実験講座で、第一線の科学者がユニークな実験を通じて、最先端の科学技術の面白さを伝えている。

今回のテーマは、「『すごい！』を伝えよう（Making Contact）」。離れた場所にいる相手に、音だけでなく、映像や物の感触、香りや味まで伝える実験に、マンチェスター大のダニエル・ジョージ教授（39）が挑戦した。

非常口サインに「hello」の文字

拍手で迎えられたジョージ教授はまず、場内の非常口サインを示す蓄光看板に、スマートフォンの光を当てて「hello」の文字を浮かび上がらせた。「こんな風に家に眠っているものでも、ちょっと工夫を加えると実験が可能になります」。「想像力を働かせれば、どこでも実験室になる」がこの講義のもう一つのテーマだ。

●パワー・アシストハンド　遠隔操作で指の動き再現

「映像の伝達」では、会場の東工大の別の場所にいる同大大学院のマイケル・ベレンズさん（28）を、舞台上の霧のスクリーンに映し出した。ベレンズさんが手袋をはめた右手の指を一本ずつ折っていくと、舞台に登場したパワー・アシストハンドも同じように指を折る。

パワー・アシストハンドは脳梗塞からのリハビリ用に神奈川工科大の山本圭治郎特命教授が開発した。関節をつなぐ蛇腹に空気を出し入れすることで、指が屈伸する。今回のレクチャーでは、こうした日本の先端技術も紹介した。

ベレンズさんの映像を見ながら、パワー・アシストハンドと握手した参加者は「まるで本物と握手しているみたい」と驚いた表情。ベレンズさんから「これで友達になれましたね」と声をかけられた。

ベレンズさんの映像とこぶしを合わせるジョージ教授（左）＝東工大提供

パワー・アシストハンドを掲げるジョージ教授

オキュラスリフトを体験する参加者（中）

●オキュラスリフト　グラスを持つ人の頭の中はジェットコースター

3次元映像のバーチャルな世界を体験するために、「オキュラスリフト」という最新型のゴーグルをかける実験も行われた。参加者の右目と左目に異なる映像が映し出され、前後、左右、上下、360度のバーチャルな風景に包まれる。お盆に載せたプラスチックのシャンパングラスを持った参加者の頭の中で、ジェットコースターが走り出した。「怖い」という声とともにグラスが一本、また一本と落ちていく。

●空中超音波触覚ディスプレー　超音波で感触を伝える

「感触の伝達」では、東京大学の篠田研究室が開発した「空中超音波触覚ディスプレー」を参加者が試してみた。皮膚の表面に超音波を集めることで、何かが動いているような感触が得られる仕組み。目隠しをした参加者の手のひらの上を、トカゲの形をした緑の光が細かく、素早く動く。「なんだろう。なんか這っている感じがする。ヤモリかな」。

次は芋虫だ。会場から笑いが起こる。「さっきと全然違う。団子虫？」

●デジタルロリポップ　電気刺激で味と香りを伝える

最後は、「味と香りの伝達」だ。参加者とベレンズさんが、電気の刺激で味覚を伝えるデジタルロリポップを舌にあて、スマートフォンに装着した器具から噴射される霧の香りをかぐ。舌で感じた味が、香りで強められ、しだいにはっきりした味覚になる。「柑橘系のにおいがする」と参加者。「レモンみたいな味ですねえ」とベレンズさん。離れた場所にいる二人が、香りと味を共有し、うなずきあっている。

多くの実験で参加者を驚かせたジョージ教授は講義をこう締めくくった。「五感の共有といっても、技術はまだまだ進んでいません。霧のホログラムは腕がすり抜けてしまうし、もっとおいしいものを味わいたいところですね。そんな夢を達成するのは次代のエンジニアである、あなたたちの仕事です」。

4人の参加者に実験を説明するジョージ教授（左）＝東工大提供

未来を感じた

聴講した東京都市大付属高1年の中山敢仁さん（15）は「先端的な技術を一般の人にもわかりやすく実験するのがすごい。未来の伝え方を感じた」と話した。横浜市の会社員、渕野公美さん（44）は「遠くの人とのコミュニケーションが実感として感じられるなんて、現代の科学は進んでいるんですね。映像のマイケル君と一緒にいろいろ感じあえるところがとても面白かった」と感心していた。

貴重な体験

今回のレクチャーは、実験の裏方として働いた東工大の学生ボランティアにとっても刺激的な体験だった。東工大工学部4年の永島史悠さん（21）は「普段触ることのできない機械を実際に動かして、そのユニークな仕組みを理解できた。参加者のお子さんと一緒にステージで体験でき、一人ひとり違った感想を聞けたのも貴重な経験になった」と話していた。

クリスマス・レクチャー

英王立研究所が毎年12月、ロンドンで子供たちのために開いている科学講座。コイルと磁石で電流が起きる「電磁誘導の法則」を発見し、物理学の発展に貢献したマイケル・ファラデーらが1825年に始め、190年の歴史を持つ。生物や数学、天文、コンピューターなど多彩なテーマについて、著名な科学者が実演を交えて解説する。「英国科学実験講座」は、その日本版として1990年から毎年のように、英国から科学者を招いて開いている。

Christmas Lecture

シンポ「本屋に行こう@大阪」

トークセッションの様子

アマゾンなどネット書店の伸長、活字離れに伴い、街の本屋が次々と姿を消している。「地域の知の拠点」としての役割を果たしてきた街の本屋の未来を考えるシンポジウム「本屋に行こう@大阪」（活字文化推進会議主催、学校法人追手門学院特別協力）が9月2日、大阪市中央区の追手門学院大阪城スクエアで開催された。

街の本屋 魅力を探る

「本屋、出版社、作家ビミョーな関係」という意味深なタイトルがついたトークセッションには、下積み時代に書店でのアルバイト経験がある芥川賞作家の川上未映子さん、講談社第一事業局次長の加藤晴之さん、会場からほど近い地下鉄谷町六丁目駅近くで街の本屋を営む二村知子さん、さらに大阪のシンボル、吉本新喜劇の座長で読書家の内場勝則さんがパネリストとして参加、東京・下北沢でビールが飲める書店として話題を呼んでいる「B&B」の共同経営者内沼晋太郎さんがコーディネーターを務めた。

新刊のインクの匂いが好き

まず、楽屋裏で物静かに本を読みふけっていることが多い、という内場さんは本屋の魅力について「洋服も実際に着てみないと着心地が分からないじゃないですか。本も実際に手にとって中身を確認してからじゃないと買えないです。新刊を開いたときのインクの匂いが好きなんです」と発言。

「作家と読者の集い」と銘打ったイベントを毎月数回開催している二村さんは「東日本大震災で原発事故が起きた際は、原子力関連の書籍を買い求める人が多くなり、改めて本の力の大きさを知りました」と述べた。

議論は出版界が直面している課題のひとつとされる出版点数の多さにも及んだ。

アマゾン 出版界のあり方を考えるきっかけ

川上さんが「本は口コミで評判が伝わっていってじわじわと売れていくものじゃないでしょうか。今は出版点数が増えすぎてしまって、本が書店に置かれる寿命が非常に短くなってしまっているのでは」と口火を切ると、本屋大賞を獲得した「海賊とよばれた男」（百田尚樹著）などの編集者である加藤さんは「かつては1か月間、書店に置かれた本が今は1週間で返品されてきます。著者にも迷惑をかけていることになります。幕末の黒船来航が日本を変えたように、アマゾンの隆盛は日本の出版界のあり方について考えてみるきっかけになるのかもしれない」と問題を提起した。

内沼さん以外の4人は全員大阪出身。ライトアップされた大阪城を望む最高のシチュエーションの中、関西弁が飛び交い、予定時間を過ぎても熱っぽい議論の応酬が続いた。

シンポ「未来を創る研究者が目指すもの」

日本科学協会と笹川スポーツ財団

日本科学協会と笹川スポーツ財団は2015年9月6日、東京都港区赤坂の日本財団で合同シンポジウム「未来を創る研究者が目指すもの」を開いた。このシンポジウムは、若い研究者が専門の研究を深めながら、その成果を社会にわかりやすく伝え、社会問題の解決などに繋げていくような広い視野をもつことを目指すもので、会場には約60人の大学などの研究者らが集まった。

基調講演を行う黒田玲子教授

最初に東京理科大研究推進機構総合研究院の黒田玲子教授が「若手研究者に期待すること」と題して基調講演を行った。黒田教授は、キラリティー（左右非対称性）の研究などで知られる。

自分の研究生活を「幅広い研究に携わることができた」と評しながら、「その原動力は好奇心と研究者として恵まれていなかったこと」と振り返った。

日本の大学で理学博士号を取ったものの「女性には研究職のポストがない」と言われ、イギリスに渡ることを決意。慣れない外国生活の中で、実験装置が無ければ市販でないものを独自に開発するなどして研究を進めたといい、「こうした苦労が、その後に役立った」と強調した。

若い研究者に対し、「恵まれない研究環境は逆に人を強くし頑張れる機会だ、逆境にあっても必ずチャンスがくる」と励ました。

また、今後の課題として1999年の世界科学会議で21世紀の科学のあり方として採択された「ブタペスト宣言」の柱で「社会の中の、社会のための科学」がうたわれたことなどを挙げながら、科学の発展と社会の軋轢（あつれき）に注目。「市民にも科学的リテラシー（教養や常識）を広めていかなければならない」と話した。最後に「常にわくわくしながら研究を進めていってほしい」と結んだ。

逆境をチャンスに

この後、特別解説として日本学術振興会の浅島誠理事が、研究費の不正行為と研究活動の不正行為についての文部科学省の対応などについて説明した。

その後、日本科学協会や笹川スポーツ財団の助成を受けた若手研究者による三つの研究報告が行われた。

発表したのは、神奈川大学の児玉謙太郎特任助教、早稲田大学の島崎崇史助手、産業医科大学の香月あすか助教の三人。児玉さんは身体能力の弱った高齢者対策に向けた知覚と行為の研究。島崎さんは地域ぐるみの健康増進のためにどんな方法をとればよいのかについて埼玉県ときがわ町（人口約12000人）で行った実験。香月さんは、うつ病患者の社会復帰と運動習慣との関係について研究した。それぞれ社会生活に密接な関係のある研究内容を披露していた。

大学選びの決定版

偏差値、知名度によらない

「大学の実力2016」発売

偏差値や知名度によらない大学選びの情報を受験生に提供する読売新聞の「大学の実力　教育力向上の取り組み」調査。8回目となる今年の調査結果をまとめた書籍「大学の実力2016」が9月25日、中央公論新社から発売された。

●過去最多678大学のデータ掲載

今年は国公私立746大学（募集停止、通信制のみの大学などを除く）に、学習、生活、キャリア・就職面での学生支援を中心に調査。過去最多の678大学（回答率91％）のデータをまとめた。

学生数や専任教員・本務職員数、入試方法別の退学率の内訳、4年・6年間の納付金、大学独自の奨学金など、7月9日付の読売新聞別刷り特集で掲載した大学別の回答を、学部別に細分化して一覧表にした。高校時代に習得しておいてほしい教科や、専任以外の教員数など、新たな項目も盛り込んだ。

さらに、学部別の就職・進学状況を、人文学、社会科学、理学、工学など14の専門分野に分類して初めて掲載。学長が15文字以内で語る大学の魅力や、専門分野別の独自の教育プログラムも紹介している。

●データの読み解き方アドバイス

「なぜいま高大接続か」（天野郁夫・東京大学名誉教授）、「退学率・卒業率を読み解く」（小方直幸・東京大学教授）など、「大学の実力」検討委員が執筆したコラムや、注目すべきデータの読み解き方についてのアドバイスも収録。巻頭では、学生を本気で育てる大学の見抜き方について、福島一政・追手門学院大学副学長（「大学の実力」検討委員）と千葉吉裕・全国高等学校進路指導協議会事務局長（同）が本音で語り合った対談も掲載した。

このほか、留学やインターンシップなど、自立した学生を育てるための取り組みや、卒業までにかかる学費についての注意点も、分かりやすく解説した。

本の収益は、東日本大震災で被災し、復興を志して被災地の大学などに進む高校生を対象にした「読売光と愛・復興支援大学等奨学金」（読売新聞社後援）に寄付する。

大学の実力2016
A4判176ページ／カラー刷り／1650円（税別）
問い合わせ　中央公論新社（☎03・5299・1730）

書籍の一覧表に掲載されたデータの一部は、読売教育ネットワークのサイトで検索できる
http://kyoiku.yomiuri.co.jp/jitsuken/

News

香港杯 全日本大学 学生大使 英語プログラム 2015-2016

香港と日本の交流を促進するアイデアを英語で発表し、上位4人の「学生大使」を選抜、2週間の香港研修に派遣する「香港杯 全日本大学 学生大使 英語プログラム2015-2016」（香港特別行政区政府 駐東京経済貿易代表部主催、ジャパン・ニューズ共催）の応募が始まりました。

香港で起業するビジネス、日本の若者向けの香港キャンペーン、50万円の予算で企画する日本の学生の香港理解促進と香港・日本の学生交流――の3つのテーマから一つを選び、パワーポイント、キーノートを使って6分間の英語発表で競う形式で、募集は12月1日まで。予備審査の結果は12月21日に発表し、最終審査は2016年1月16日に東京・大手町のKDDIホールで行われます。

問い合わせは事務局
☎03・3216・7112　メール：hongkongcup@yomiuri.com
応募方法についてはウェブサイトをご覧下さい
http://www.yomiuri.co.jp/adv/hongkongcup2015/

2015年度 新聞検定実施

読売新聞の記事を読みながら、情報を読み解く「メディア・リテラシー」向上を目的とした「2015年度新聞検定」（読売新聞東京本社主催、学研グループ、市進教育グループ共催）が9月12日、東京都、千葉県、埼玉県、茨城県内の市進学院の教室など約180会場で行われ、小中学生ら約8000人が受検しました。

検定は、情報を正しく読み解く力、視野を広げてものを見る力、自分の考えを正しく伝える力を養う内容で、「初級」（小4～6年生向け）と、「中級」（中学生以上向け）の2部門（検定時間50分）で行われ、今年7月4日付け朝刊の記事をもとに作成された問題が、それぞれ15問出題されました。

受検料は無料で、成績表のほか、全員に読売ＫＯＤＯＭＯ新聞（11月中旬の一号分）がプレゼントされ、基準点以上を取った受検生には、認定証も送られます。

英和翻訳コンテスト　高校生特集

最優秀は武さん

（渋谷教育学園渋谷高）

読売新聞が発行する英字紙ジャパン・ニュースはこの夏、「英和翻訳コンテスト Translate This 高校生特集」を開催しました。課題の英文は、人気歌手のテイラー・スウィフトさんや音楽配信サービスなどのキーワードがちりばめられ、若者の興味をそそる内容でしたが、構文が複雑で難しいものでした。

国内外の高校生計40人から届いた力作の中から、渋谷教育学園渋谷高校2年の武沙佑美さんが最優秀に輝きました。武さんの最優秀作品、優秀・佳作入選者名を発表します。出題した英文と、ジャパン・ニューズ記者による訳例を読み比べて、ぜひ今後の学習につなげてください。

入選者　（敬称略）

●最優秀	武　沙佑美	東京都	渋谷教育学園渋谷高校 2年
●優　秀	谷川　清夏	東京都	国際基督教大高校 1年
	浦　恵里加	東京都	白百合学園高校 3年
●佳　作	伊藤　由乃	中　国	上海日本人学校高等部 1年
	栗原連太郎	神奈川県	慶応義塾高校 1年
	島岡　紗也	大阪府	四天王寺高校 1年
	高崎　　愛	東京都	筑波大附属高校 2年
	峰岸　茉穂	埼玉県	県立秩父高校 3年

武さんのコメント
小学生の時、アメリカに約4年間暮らしました。ジャパン・ニューズの通常の和英翻訳コンテストで佳作に入ったことがありますが、英語を日本語にするのはなかなか大変です。旅と文章を書くのが好きなので、将来は雑誌や新聞の記者になれたらと思っています。

課題文

LOS ANGELES (AP) — Apple's abrupt about-face on paying royalties for songs during a three-month free-trial period for its new music service was a symbolic victory for superstar Taylor Swift and other artists, and a shrewd business move by Apple, at a time when the streaming phenomenon is causing major changes in the music industry.

The olive branch extended by Apple comes as music is increasingly being consumed on streaming services like Spotify and Deezer — to the detriment of album sales and iTunes downloads — heightening tensions between artists, labels and service providers over who gets paid and how much.

Apple had already agreed to share revenue from the new Apple Music service once users start paying a $10-a-month subscription fee for the service, which it plans to launch June 30. But the technology giant wasn't planning to pay artists and labels directly for the use of their music during the free, 90-day trial period that it's offering to get fans to try the service.

(The Japan News 6月24日付7面)

《最優秀》武さんの翻訳

アップル社の、新しい音楽配信サービスの3か月無料お試し期間中に配信する音楽の使用料をアーティストやレコード会社に払う、という突然の方針の大転換は、人気歌手テイラー・スウィフトをはじめとする多くのアーティストの象徴的な勝利を意味し、また、ストリーミングが音楽業界に大きな変化をもたらしている中でのアップル社の賢い戦略だった。

いまや、音楽はストリーミング配信を行う「スポティファイ」や「ディーザー」などによって急速に購入されるようになっている。これらのサービスはアルバムの売り上げや iTunes からのダウンロードを妨害するため、サービス提供者とアーティストやレコード会社との間で、誰がいくら支払われるのかをめぐって緊張が高まっている。そんな時勢の中で、アップル社は和解を申し出た。

アップル社は、新サービス「アップル・ミュージック」の配信を開始し利用者が月10ドルの受信料を払い始める予定だった6月30日以降は、収益をアーティストらと分配するつもりではいた。だが、このテクノロジー業界の大手は、サービスをファンに試してもらうために設定した90日の無料お試し期間中に、直接アーティストやレコード会社に音楽使用料を払う予定はなかった。

講評者の訳例

【ロサンゼルス=AP】アップルが自社の新しい音楽配信サービスで、3か月間の無料試用期間中でも曲の使用料を払うことにした突然の一方針転換は、ストリーミング配信の広がりが音楽業界に大きな変化をもたらしている現在、人気歌手テイラー・スウィフトらアーティストの象徴的な勝利であり、また、アップルの抜け目のない経営判断でもあった。

スポティファイやディーザーなどのストリーミング配信サービスで音楽を楽しむことが広がる中、アルバムの売り上げや iTunes（アイチューンズ）のダウンロード数が落ちて、アーティストやレコード会社、配信会社の間で、誰にいくら支払われるかについて緊張感が高まっている。このような状況の中で、アップルは和解を申し出た。

アップルは既に、6月30日に開始予定の新サービス「アップルミュージック」で、利用者が月額10ドルの料金支払いを開始した段階で収益を分配することで合意していた。しかし、当初、この大手IT企業は、音楽ファンに新サービスを試してもらうために設けた90日間の無料試用期間中はアーティストやレコード会社に直接、曲の使用料を支払うつもりはなかった。

Translate This 高校生特集

海外で学ぶ・リレーエッセー⑨

比アテネオ・デ・マニラ大学「フィリピンで真の世界に触れる」

渋谷教育学園幕張高校卒、比アテネオ・デ・マニラ大学4年 宮前（みやまえ）久美（くみ）さん

どうしてフィリピンの大学への進学を決めたのか、とよく聞かれます。答えは簡単です。アテネオが私の夢の大学だから、です。フィリピンで生まれた私は、バスケットボールの試合で（大学のチーム名称）アテネオ・ブルー・イーグルスを応援したいと焦がれて育ちました（日本人学生が早稲田とか慶應大学の花形のスポーツイベントで応援したいと夢見るのと同じです）。その思いは、高校進学で日本に引っ越した後もあせることはありませんでした。

アテネオ・デ・マニラ大学は、フィリピン国内の政府公務員や非営利活動法人の創設者の多くを輩出しています。成長する過程で私は、フィリピンの地位を引き上げたい、少数民族や貧しい人を助けたい、といつも思っていました。この目的を達するのにアテネオがベストだ、と信じていました。

哲学と神学に基づく教育のおかげで、学生たちは人生でどの道を選ぶかだけでなく、なぜその道を選んだのか、の解答も発見できるのです。

大学では毎年、学生たちが「真の世界」を垣間見ることができるプログラムが用意されています。大学3年生の私は、エンゲージメント・プログラムを受講しました。肉体労働を含む、一日4時間、計16時間の労働を体験することになり、私が選んだのは街売りでした。土曜日を4回以上も費やして、私は毎回4時間、道路のそばで食べ物を売りました。これには目を見開かされました。というのも、生計を立てるために、この仕事がどんなに過酷なものか全く理解していなかったからです。毎回私が稼いだのは150ペソ（日本円で400円くらい）で、これは標準の生活水準を下回るものなのです。人々の生活を垣間見て、人々が本当に必要としているものの本質を理解することができたのです。この体験によって、私が（この国の地位を上げるために）やらなければならないことに気づき、動機付けになりました。

これは、多くの交換留学生が永遠の宝物にすることができる体験なのです。アテネオは交換留学生を受け入れて、現地学生と同様のプログラムを受講させるのです。彼らは全員、世界中にあるアテネオの提携大学の学生です。日本だけでも提携大学は22に上ります。

アテネオでの学位取得は、単に卓越した知識を取得するだけでなく、「他人のための人」になるための責任感を持つことなのです。これが、アテネオです。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2015年4月24日）

ケソンシティーの子どもたちと宮前久美さん（本人提供）

アテネオ・デ・マニラ大学
1859年カトリックのイエズス会が創立した名門私立大学。フィリピンでの大学で最も評価の高い大学のひとつ。マニラ市のケソンシティーにある。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイト（http://ryu-fellow.org）へ。

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0002078758でお読みいただけます。